木橋の外観を備えた
鉄筋コンクリート橋

三朝橋（みささ）

霊峰大山から日本海へ流れ出る天神川。その支川三徳川流域には千年にわたって畏怖の念をもって守られてきた三徳山があります。山岳修験の場としての急峻な地形と神仏習合の特異の意匠・構造を持つ建築とが織りなす三徳山は、国宝投入堂をはじめ独特の景観を有しています。

その参詣の折に白狼により示され発見されたとの伝説が伝わるのが三朝温泉で、世界でも有数のラジウム温泉として有名です。この三朝温泉街の中心に位置し、三徳川に架かる橋梁が平成 17 年、登録有形文化財に指定された三朝橋です。

現在のコンクリート橋になる前は、大岩橋と呼ばれた（明治 18 年架設）木橋でしたが、大正 7 年の大水害で流失し、その後は仮橋のままでした。このため、林業開発に伴う重量物運輸と、年々増大する交通量に対して、また、年々増加する来訪客に対しても、永久橋の要望が高まりました。こうした地元の熱心な架橋運動により、昭和 8 年（1933）ようやく工事は始まりました。

三朝橋の設計は当時、日本の建築・建設の権威者であった京都帝国大学の武田伍一です。国会議事堂をはじめ山口県庁舎など多くの建築物を手掛けた彼は近代日本を代表する建築家の一人として「関西建築界の父」と呼ばれました。

橋長 68.6 m、幅員 5.5 mの鉄筋コンクリート造・木橋型連続桁橋の三朝橋は、コンクリート橋でありながら観光地である三朝温泉の情緒を表現するために、純日本様式の木橋のデザインが取り入れられました。上部工の親柱、擬宝珠高欄、春日燈籠、床版といずれも木橋を意識した外観で、特に高欄部分は、若桜産の青御影石を使用しています。また、下部工も細部に至る迄外観を意識し、三朝温泉街との調和を図っています。

三朝橋は工費 40,000 円をかけて、昭和 9 年 5 月に完成しました。竣工式には県知事をはじめ県の各関係者、地元町長、地元小学校生等が参列したそうです。地元の橋に対する熱い思いが伝わってきます。翌年にはこの三朝橋を通る温泉街に新道路も建設されましたが、現在の様な三朝温泉街が形成されたのは昭和 30 年以後のことでした。

三朝橋は、80 数年経た今も当初のままの姿を残しています。橋体と両岸に設置された照明は、夜間になると橋全体をライトアップし、来訪する者に昼間とは違う温泉街の情緒を与えてくれています。

■位置図

４本の円柱と貫，肘木等から構成される橋脚に，桁高を抑えたＴ形桁を載せ，床版両端で板敷風に目地を切り，橋上には擬宝珠高欄，春日燈籠を設けるなど木橋を意識した丁寧なデザインである。

薄暮のなか、三徳川の河原風呂と三朝橋の燈籠の明かりが温泉街の風情をかもしだしている。

親柱の「三朝橋」の文字は南苑寺を創建した臨済宗相国寺派管長の橋本独山師による

登録有形文化財「三朝橋」
上部工の親柱、擬宝珠高欄、春日燈籠、床版といずれも木橋を意識した外観となっている。